日本人の社会的特質の原点をさぐる
鈴木榮太郎の「日本農村社会学原理」によせて

冨　吉　素　子

１．問題の所在

一般的に、日本人は自立心が希薄だといわれてきた。企業における上司と部下、学校における教師と生徒、一昔前の親と子などの上下関係の中で、個としてよりも集団の一員として序列の中で行動することが要求されてきたからだといわれる。上下関係にあっては上にある者も下にある者も自己主張することは許されず、各々は全体のためにつくすことが美徳とされ、そのことが日本人の自立心の成長を妨げたと考えられる。

ところで、近年、いじめや自殺が学校や社会で大きな問題となっている。いじめは、大勢の、または、複数のメンバーが、学校の内外で、一人の生徒に対して陰湿な行為を集中的に行うというものであり、その結果、被害生徒が自殺に至る場合もある。同じいじめは大人社会でもあり、子どもの世界のいじめは大人社会の反映だといわれる。一方、ケイタイ電話の普及はめざましいものがあるが、このケイタイ電話による頻繁なメールのやりとりも加熱ぎみである。ある調査によれば、メールを受信した場合、それに対し５分間以内に返信しなければ、仲間はずれにされるという。これらの現象と先述した従来の日本人の閉鎖的人間関係とは関係があるのではないだろうか。そのよって来るところはどこにあるのであろうか。

学校におけるいじめについて考えると、生徒たちのいじめの思考回路がどのように働くかを考えてみよう。その方法として、生徒たちが幼き日より子ども時代に至るまでに、母親たちが子どもたちのしつけをいかに行い、コミュニケーションのはかり方をいかに教えてきたかということに目を向けたい。教えられたしつけによる自主的な判断や内的な良心があれば、過度ないじめを行わず、いじめに加担せず、いじめに立ち向かうこともできるのではないだろうか。一方、分を待たず繰り返されるケイタイ・メールの中にある仲間意識は、一見、いじめや自殺とは関係がないように思われるが、その根底には共通した何かがあるのではないだろうか。

こう考えてくると、子どもたちが母親世代から受けたしつけの背景の検討が必要であると思えてくる。10代から30代の青少年世代を考えると、この層の母親の早い年代層に、育児やしつけのバイブルとしてもっともよく読まれたのが『スポック博士の育児書』（B.Spock、1966年）と松田道雄の『育児の百科』（松田、1967年）であったことに思い至る。アメリカ型のしつけと、アンチテーゼとしての日本型しつけの比較考察を行い、それらの考え方が母親たちにどう影響したのかをみることも、問題解決の一助になるのではないだろうか。50年間に前者は250万部が売られ、後者も定かではないが、同程度以上に売られていたと見られる。アメリカの青少年は自己主張が強く、対外的に積極的であり、日本人の青少年は自己主張が弱く、消極的であるとするならば、この間にある差異とは何か。その差異は何にもとづいて生まれたのだろうか。

こうした日本の子どもの成長は、日本人が長らく生きてきた農村社会に流れる村の「統一的秩

序」とも関係しているのではないだろうか。鈴木榮太郎の「日本農村社会学原理」を参考にし、考えてみたい。

２．子育てにおける日米の「自立性」へのまなざしの相違

⑴　スポック博士と松田道雄における子どものとらえかた

両育児書は800ページ余りの大部のものである。その構成の大きな違いはスポック博士が、まずアメリカの歴史や、何のために子どもを育てるのか、人間不信の時代に生きるにはといった、先祖の来歴や心構えを述べて、年齢段階に即した説明を行っているのに対して、松田道雄は即、年齢段階別の説明に入り、各章節で種々の解説を挿入していることである。

スポック博士は最初の部分では、「自信をもちなさい」、「赤ちゃんをたのしみなさい」、「厳格にするか、寛大にするか」、「なんのために子どもをそだてるのか」などの心構えについて述べている。

「なんのためにこどもをそだてるのか」の項では、

> 20世紀にはいってから、こどもを育てることは、だんだん、むつかしくなりました。どんな子にそだてたらいいのか、それがぼやけてしまったからです。昔は、していいこと、わるいこと、のけじめがはっきりあって、こんな夢をもち、こんな人間になってほしい、という、はっきりした目あてがあったものですが、それが今はなくなってしまったからです。そればかりではなく、いまは、人間はなんのために生きるのか、それさえわからなくなっています。
>
> そのかわりとして、児童心理学をたよりにしてはいますが、どうもこれは、たしかにこまかい問題を解決する助けにはなっても、根本的な問題には、あまり役にはたっていません（Benjamin Spock, M.D, 1966年、p.17）。

などの記述がある。20世紀に入ってからの近代化、産業化の前にアメリカ人が子育てにたじろぐ姿があらわされている。

スポック博士は1903年コネチカット州生まれ、エール大学医学部、コロンビア大学医学部を卒業後、ニューヨークで小児科医院を開業した。その後、ウエスタンクリーブランド大学の教授となった人で、その間、歴史や外国に関する研究も行っている。

その観点から、「よその国やほかの時代では」の項で、生きるということがどのように考えられてきたかについて述べている。

> 昔は、たいていどこの国でも、この世に生きてゆく人間のいちばん大切なつとめは、暮らしを立ててゆくなんてことより、神のしめしたもうた勤めを果たすことによって、神の御心にそうことだ、とされていました。（中略）植民地時代のアメリカにも多かれ少なかれ、同じようなことがありました。子どもたちにとって、その生きがいは、暮らしをたてることだなんて、だれもおもいもしませんでした。神の御心にかなった人間になるためには、煩悩をたち切らねばならぬ、といつも戒めてきたのです。

20世紀以降の子育てには明確な目標や理想が見出せないのに対し、中世のヨーロッパや植民地時代のアメリカには神を中心とした世界、神の御旨にかなった生活があったことを告げている。そして、ここ100年間には、「人は国に仕えるべきだと教えられました。ナポレオン時代のフラン

スや、大英帝国やドイツがそうでした。現代の国々のなかにも、たとえば、ソビエトのような共産主義の国だけでなく、民主主義の国イスラエルなどでもこの傾向はつよいようです」と観察している。

さらに、そのような国々では、親や教師はどのように子どもを導いていったのかということについて次のように述べている。

> こうした国では、両親と教師が、国の指導者と歩調をあわせて、こどもに協力とか勤勉とか、国に対する忠誠心などを教え込んでいます。だから、親たちは、じぶんのしつけは、これでいいのだろうかと気にしたり、疑問をもったりしなくてすむというわけです。
>
> それといっしょに、たいていの国では、こどもは、社会学者がいう一族または一門、つまり＜家＞のほまれとなるように育てられるものとされています。そして、将来、＜家＞が認めた立派な職業につくために、幼年時代、青年時代をすごします。こどものときは、こどもなりにやがて長じてからは、おとなとして、年長の人を立て、敬わなければなりません。結婚にしても、恋に現を抜かすことは許されず、＜家＞の栄えを第一として、おやがきめた結婚に従わなければならないのです（前掲書、p.18）。

これらの描写は戦前の日本をも思い起こさせる。国に対する忠誠心や家のほまれ、そして年長者の尊敬などは前近代社会の道徳として日本においても教育された。

20世紀のアメリカに関しては、スポック博士は「子供天国」と評している。人は「家や、国や神に尽くさねばならない、などと教え込まれて育つこどもは、まあ、いないので」あり、「むしろ、人生の目標をどう立てようと、どんな職業をえらぼうと、それは本人の自由だ」と考えられている。しかも、「その人生の目標とは、主として、お金や物で現されることがほとんど」という。

そして、他の国なら、親は、低い地位や職業についていても、子どもにとっては、すぐれた立派な人なのだと、しつけられているのに、アメリカでは、父親は息子にむかって、「おまえは、わし以上にやってくれよ、でないと、お前を尊敬するわけにはいかないからね」と、言い、子どもはヨーロッパとはさかさまのしつけをされている、と嘆いている。

このような基本的な歴史観、社会観を提示した上で具体的な育児の助言へと入っている。ここでは、二つの具体的な育児法を記して、日本との考え方の違いを考えたい。

一つは「ねかしつけ」の問題であり、もう一つは「抱きぐせ」の問題である。

⑵　「ねかしつけ」の日米の考え方の相違

スポック博士は、寝つきの悪い赤ちゃんや目を覚ます赤ちゃんへの対処の方法として、次のように述べている。

> 目をさまして泣いてもなんにもならないと、まず赤ちゃんにおもわせることです。それには、二晩か三晩、赤ちゃんがどんなに泣いても、そばに行かないことです。はじめの晩は20分か30分ぐらい泣くでしょう。（中略）二晩目は10分くらい、三日目はもう泣かないでしょう。（中略）このクセを直す間、少なくとも２、３日は、どんなに不便でも、両親と別の部屋にねかさなければいけません。
>
> （中略）小さな子どもは、夜中に怖い夢をみて、目をさましやすい時期があって、何とかかんとかいっては両親の部屋に入ってきたり、いつまでも泣いていたりするものですが、両親の方は、とにかく眠りたいと思うから、つい、自分のベッドに入れてしまいます。そのときは、それが一番いいようにおもう

のですが、あとになって、あれは失敗だったと気づくはずです。…初めから、かならず自分のベッドに連れ戻してねかせなさい。どんなことがあっても、子どもは両親のベッドに入るものではないとはっきり思い込ませるほうがいいと思います（スポック、1966年、pp. 285－287）。

このように、スポック博士は、子どもに対して厳格な姿勢をとっている。この姿勢は一貫しており、３ヶ月以降は別室のひとりねかせを勧めている。一方、松田は同じような状況の赤ちゃんや子どもに対し、次のような接し方をするように述べている。少し長くなるが、肝心の部分なので、引用したい。

赤ちゃんのねかしつけ（11カ月～12カ月）の赤ちゃんについては、

問題はねつきのわるい子だ。ふとんにいれてからかるくふとんの上からたたいたり、歌をうたったりしなければならぬ。赤ちゃんはミルクのゴム乳首をいつまでも吸っている。母親がはなれると目をさましてなく。とうとうしまいには、母親が添い寝をしてやっと安心して、母親の胸に手をいれたり、髪をさわったりしてねつく。もちろん、母乳のでる場合は乳房にかじりついてくる（松田道雄、1967年、p. 407）。

（１歳～１歳６ヵ月）のころは、

とにかく、早くねむらせてしまうことを目標にする。母乳をやってすぐねむるなら母乳を与える。添い寝をしただけで安心してねむるのなら添い寝をする。ミルクを100cc あたえれば、のみながらすぐねむるのなら、それでよい。（中略）時がうまく解決してくれるものを、あせって、親子ともに苦しむのは、おろかである（同掲書、p. 433）。

（２歳～３歳）のころは、

ふとんにはいってからねつくまで、母親の姿の見えないところでもねられる子には、タオルをクチャクチャかんだり、毛布をしゃぶったりしている子が、案外おおい。

（中略）このごろはテレビを見ながら、ねむってしまう子も出てきた。ねむり方にこだわる必要はない。あかりをけして、ひとりでねかそうとして、毎晩しかりつけたり泣かせたりするのは、賛成できない。母親に依存して安心してねむりにつくのが、いちばん悪夢におびやかされることが少ない（同掲書、p. 500）。

（３歳～４歳）のころは、

…お祈りをして、一日の終了を神に感謝し、夢の天国にいく西欧式からみると、現世に愛着をもちつつねむる日本式のねむり方は、未練たらしくみえるだろう。子どもを夫婦と別の部屋にねかせる習慣の国にすれば、子どもが母親からはなれてくれないとこまるにちがいない。

けれど、深夜に目がさめても、いつも母親がちかくにいてくれるということで、精神の安定している日本の子どもでは、未練がましいねむり方を苦にすることはない。指しゃぶりも、毛布も、ミルクびんもすべて母親の代用品である。子どもは母親にすがりついているという感触を、唯一の、さいごのうつつとして睡魔とたたかっているのだ（同掲書、p. 536）。

松田は文中で明らかなように、育児は自然に任せるのがよく、夜泣く子や眠りにくい子には母親がそばにいたり、母親の布団に入れても早く眠らせる方がよいと言っている。そのことにより子どもの精神が安定するとも述べている。また、その方が、疲れて寝ている父親に対する配慮であるとも述べ、あくまでも現在の家族の平穏を大事にしている。

⑶　「抱きぐせ」に対する日米の考え方の相違

次に「抱きぐせ」に対する両者の見解についてみよう。
まず、スポック博士の見解から。

こどものいいなりになる親
むずかるとすぐだきあげて歩き回る、こんなことを、ものの二ヶ月も続けていると、赤ちゃんは、目をさましている間ずっと、両手をさしだして、抱いてくれとせがむようになります。そこでまたいうことをきいていると、そのうちに、赤ちゃんの方は、お母さんがどんなに疲れていようと、この人なら自分のいいなりになるんだとおもいこんで、ますますいうことをきかなくなり、手のつけられない暴君になってしまいます（スポック、p. 281）。

もし赤ちゃんが、これとこれは親に要求してもいいのだという判断ができるのなら、赤ちゃんのいいなりになるのもわるくないでしょう。しかし、赤ちゃんにそんなことはできるわけはありません。むしろ、赤ちゃんは、親がはっきりと教えてくれるはずと思っています。それが赤ちゃんを安心させるのです。それなのに親がぐずぐずしていれば、赤ちゃんも不安になってきます。たとえば、泣くたびに、そのまま放っておくなんてとんでもない、といわんばかりに、心配そうに抱き上げていると、赤ちゃんの方でも、一人でほうっておかれては大変不安な気持ちになってくるのです（同掲書、p. 282）。

このようにスポック博士の育児法は、母親が大人として子どもに接し、一時の感情に流されることなく、またそのときの状況に流されることなく、それ以後の子どもの生長を重要視している。あくまでも主導権は母親にあることを強調し、母親自身が不安がったり、臆病になったりすることを戒めている。

次に松田の見解をみよう。

抱きぐせ
抱き上げることで赤ちゃんが、気持ちよくなり、生活が平和になるのなら、一日のうちに何度か抱いてやりたい。また、抱かれて、からだをしゃんとさせることが、この時期の赤ちゃんの運動の一種である。抱きぐせは悪であるという思想で、授乳のとき以外は、赤ちゃんを絶対に抱いてやらないというのは間違いだ（松田、p. 102）。

よく泣く赤ちゃん
よく年寄りから、抱きぐせをつけてしまったと言われるが、それは逆である。抱きあげでもしなければ、泣きやんでくれないほどの泣き虫なのだ。泣き虫が永遠につづくということはないのだから、抱きあげてやるほうがいい。（中略）外気にあたり、そとのものをみて、いくらかつかれれば、家へ帰って眠ってくれる（同掲書、p. 114）。

このように松田の態度も一貫しており、育児は子どもが中心である。したがって、子どもの夜泣きや抱きぐせは、母親にとってはそれがつらいときがあっても、添い寝をしたり、何度も抱いてもよいと、許容的である。

このように、スポック博士と松田の見解には異なることが多いように見受けられる。それは、これらの育児書を読み、それを参考にして育児をした母親たちが30年～40年にわたり、影響されたことを意味している。しかし、現実的にはアメリカ的自立性、自己主張の強さは日本の子ども

たちに育たなかったように見受けられる。

また、大久保（孝治、2005年）によれば、子どもを別室で寝かせることについては、1970年前後に約５％あったが、それ以降は減少し、現在はほぼ０％に近い（大久保、2005年）。このことは、アメリカ的育児法が一時はもてはやされたが、長期的には必ずしも受け入れられず、本来の日本の育児法がなお生き続けていることを示している。育児という人間形成上の根本的な部分で変化がみられないということは何を意味しているのであろうか。戦後の新憲法の制定、民法の改正、その後の高度経済成長を経ても日本的思考様式、国民的性格の根底は変化していないと考えてもよいのではないだろうか。

それでは、その日本的思考パターン、国民的性格とはいつ、どのような状況下に形成されたものであろうか。その点について、次節で考えていきたい。

３．日本農村における農民の性格

日本は敗戦とともに制度的には民主化され、経済成長を遂げ、先進国に参入もできた。一時はGNPが世界第二位となるほどの豊かさを享受したが、その一方で、最初に述べたように人間関係は相変わらず上下関係を有し、閉鎖的である。

もっとも今日的な現象の若者のケイタイ・メールの送受信も、間をおかず返信しなければ、相手から友達がいがないと見られ、そのことに束縛感を抱く者も多い。にもかかわらず、メールはやめられず、常にケイタイチェックは怠れない。それは日本の若者が仲間集団から外れることを嫌っての行為だという（佐藤直樹、2006年、p. 49）。つまり、集団からの離脱をおそれるということは、常に集団の一員でありたいということを示し、その頻繁さは外国の若者には少ない現象である。

このことは日本の若者もいまだ個人としての確立が未熟であり、自立心が希薄であるということを示している。

鈴木榮太郎は、戦中・戦後ではあるが、日本人を「個人心理学的」方法で論じると、徒労に終わるであろうと述べ、その究明の方法について次のように記している。

> 従来の欧米の社会学は、個人と其自由を著しく高く評価する生活態度を持すること多き欧米を主として都市の生活の理解に最もよく適応する問題と方法を含んでいる。…個人の生活原理が家とか村とか言ふが如き社会形象によって規定されるところ多き我が国の特に農村の社会生活の理解には、個人と個人との関係や個人の心理の究明は余り重要な問題ではなく、家とか村とかに関する事項がここでは最も主要な問題となり、又其れに応ずる方法が必要である（鈴木、1968年、p. 2）。

個人として日本人を理解することはあまり意味がなく、当時の農村の社会生活の中にこそ重要な問題が存在するとした。農村の社会生活の原理が現在でもなお、われわれの生活を広く、深く支配している。これは欧米に比べ、後発の近代化だったからではない。なぜなら、広くアジアについて鈴木は、次のように述べているからである。

> 中国や朝鮮の村落はむしろ欧米の村落型に近いのではないかと思っている。欧米の特に都市における社会生活の型を個人主義的・自由主義的といい、日本の特に農村における社会生活の型を集団主義的・伝統主義的というならば、その意味において中国や朝鮮の村落は日本の村落と欧米の村落の中間に存しているように思われるのみならず、むしろ欧米に近いようにさえ考えられる（前掲書、pp. 27－28）。

それでは、アメリカの農村との性格は、比較して検討できるだろうか。アメリカについては、次のように述べている。

> …村のない農村も考えることができる。事実米国のある地方の農村では、点在する農場はあれども村はない。脆弱なる社会関係の地域的な統一は、仔細に観察すればないわけではないが、そこの人びとの社会生活の中にはそれはきわめて弱い機能をもっているにすぎない（前掲書、p. 53）。

ここに日本の農村の社会生活の原理の究明が必要とされる。農村の共同性やその中から生み出される農民的性格が今日のわれわれの社会生活や人間関係の根底をなすと考えられるからである。その点について、まず、日本農村の社会構造および社会関係について検討し、次に鈴木が言及しているソローキンのいうアメリカの農村の性格について比較検討したい。

⑴　日本の農村の性格

鈴木は日本の社会構造の変化と社会生活の秩序の瓦解への過程を次のように述べている。

> 農民といえば隣保共助を営み、朴訥で純情であると直ちに考える。集まりて村をなして生活すればとてそこにおのずから隣保共助があるのではない。農業をいとなみ教養にとぼしき者であるが故に朴訥で純情であるのではない。一定の社会構造は、個人がそれを欲すると否とに拘わらず、なんとしても隣保共助を行い朴訥でなければならぬように制約するのである。しこうしてかくの如き社会構造が、わが国の農村には有史以来存続し、それが今亡びんとしている（前掲書、p. 45）。

ここに述べられている社会は個人を制約し、さらに、この構造が農民の思考様式を一元的にした。また、農業のあり方が不変であったために、この構造も不変であったと考えられる。

> 私は先に社会意識の自足的相互制約組織が自然村の本質であると述べたが、しこうしてこの相互制約組織は、個人の立場から自然村の本質に向かって掘り下げていった場合、最後に到達されるものであるが、この最後に掘りあてたものを観察する時は、それはそこにみる個人などの関係あるいは作為以上のものであることを知るのである。私等はそこに個人等の意志より超絶した一個の独立した意志を認めざるをえない。それは遠い昔から存続してきたものであって、村に生み落とされる代々の村人等をその欲するままに鋳出してきた生活規範であるという事ができる。しかもそれは長い歴史の間に常に発展しつづけてきたものであって、固定しているものでもない。それは村に住む村人等が共同に体験しているところの、そして彼らのみによって意味づけられているところの、不文の行動原理であるという事ができる（前掲書、p. 68）。

さらに鈴木はこの独立した意志について、「そこに生活する個人等の生活を通して、自らを表出している一個の精神である」と規定し、また、それは「一個の秩序とも道義とも理念ともいうことができる。それは個人より超絶した一つの意志、あるいはむしろ個人の意志の根源の意志者として考えうるものである」と考えた。それは「個人等の意志の綜合統一によってできたのではなく、何百年も昔からの過去の村人また現在の村人、そしておそらく将来の村人等の全体の意志の綜合統一となら言い得るであろう」と述べている。意志の統合としての精神がまずあり、そのなかで生まれ、生きていく農民の思考様式を死ぬまで制約することである。このことは現在生きている村人、広くは、都市の人間も農村から移動して高々50年しかたっておらず、これは、すな

わち、現代の個人をも制約している。

つまり、「現在生きている村人に対しては個人的意志のむしろ根源である。個人の行動原理であり、個人間のあらゆる関係の規定そのものである。そこでは、個人の個々の意志はあまり問題でなく、個々の意志の根源すなわち村の統一的秩序が問題である。村の統一性・全体性の前に個人の個々の意志はそのいわば部分であり、その作用の一つ一つの場合にしかすぎない」（前掲書、p. 69）。

鈴木は日本農村の社会構造を分析するに当たり、構成する集団を以下の十種に分けている。

一　行政的地域集団　　六　経済的集団
二　氏子集団　　七　官制的集団
三　檀徒集団　　八　血縁的集団
四　講中集団　　九　特殊共同利害集団
五　近隣集団　　十　階級的集団

十種類の集団は、土地に結びつけて考えるときに重なり合いながら、一定の地域内に累積している。「一般に地域的に三重に重なり合い、もっとも小なる累積体は集団の輪が同じ大きさにおいて累積しているものであって、この累積体の若干が集まって中位の累積体を構成している」（前掲書、p. 99）。

その累積体は、第一社会地区（小字、組）、第二社会地区（部落）、第三社会地区（町村、部落、組）とその構成体を層化することができる。この累積体は第一、第二、第三の順に個人間の社会関係が希薄化していく。

このような分類の最小地域である一地域では一致団結せざるをえなかったわけであるが、それはどのようなことであったのだろうか。その理由について鈴木は、下記の点を克明にあげている。

一、水田経営に従事してきたわが国の農民は、灌漑排水のための協力を必要とした。その利害者間の団結は、感情的要素も加わり、極めて強く、利害反する他者に対しては排他的でさえあった。
一、水田は土地に対する多大の労力を要する故、水田経営農民は耕地に対する執着心強く、そのために土地に定着する傾向を多くもっている。そのためと特殊な婚姻習俗のために、地縁の上に血縁が重複している。
一、江戸時代前、農村は久しく不安の状態にあったので、一地域の人びとは共同防衛の必要を常に感じていた。
一、江戸時代の村治制度における一村連帯の制度。
一、村民の大部分がいつの時代にも、生活のあらゆる方面に社会的に等質であった（前掲書、p. 104）。

以上のごとき歴史的社会的事情により、一地域の人びとは一致協力せざるをえない必要に迫られてきた。一つめの「利害反する他者に対しては排他的でさえあった」ことは、現代においても大きくは、たとえば外国人に対する排外性があり、小さいところでは学校のクラス内における個性を許さない排除性に通じる。二つめの「地縁の上に血縁が重複している」は、都市化した地域ではかなり薄められた感があるが、村落においては、いまだその特性を有している。三つめと四つ目の共同防衛の必要性、および一村連帯についても、大きくは企業間の横並び意識や談合にみ

られ、小さいところでは中学、高校の部活の練習や試合における脱落者の防止や問題が起きたときの連帯責任などを例としてあげることができる。そして、五つめの「生活のあらゆる方面に社会的に等質であった」というのは、企業や組織の中の上下関係の構造の中に現在も見ることができる。また、地域を例にとれば、町内会が全国どこでもほとんど同じ組織形態と活動内容を有することは、その限りにおいて住民を等質的となす。さらに、小中高の学校の画一的・均質的教育の中にも等質性を見ることができる。

さて、先述の一地域とは、「だいたいに江戸時代の村をなしていたものであって、第二社会地区上の社会的統一であり」、時代とともに行政上の地区が統廃合されたとしても、「いわば社会的交流の自足的範囲は、いつの時代にも自他共に認むる者が存し、居住の多少や移動により集落の概観とは多少異なる場合もあるであろうが、かくの如き自然的社会的結塊はいつの時代にも厳として存していた」（前掲書、p. 105）。

このような主に第二社会区の村の機能は、村に住む人々を団結せしめ、自然的な緊密な関係をつくりあげた。村の精神が個人の意志や関係をつくりあげるのであるから、個人の行動原理はその精神により生成されたと考えられる。それが社会的制約と感じられることもあったと思われるが、人々は順応的であり、その精神を持ち続けたといえる。翻って考えれば、この村の精神とそれにより生成される個人の行動原理は脈々と現代にも受け継がれ、個人の集団への埋没という現象を生んでいるのではないだろうか。

⑵　アメリカの農村の性格

鈴木はアメリカの農村の結合紐帯のあり方や社会体制の形態についてソローキンの分析を引用し、検討を行っている。ソローキンはアメリカの農村について次のように述べている。

> 点在する農家は、相互に直接に関係はなくとも、いずれも同一の田舎町に依存することによって間接に社会的なつながりを有しているとみるのであるが、個々の農家が中心に依存する関係の内容、即ち、結合紐帯の種類はいろいろあるのであって、紐帯の種類によって依存している田舎町はかならずしも同一ではない。経済的に依存する田舎町は甲町であるが、協会は乙町に行くが如き場合、都鄙共同社会の中心としては甲町をとるか乙町を取るかの議論があり得るのであるが、一般に経済的に依存している田舎町を中心とみる考えに一致されているようである（前掲書、pp. 108～109）。

アメリカの農家は広い土地に点在し、日本の農家のように水田耕作はなく、労働においても水田耕作に付随する共同作業的な性格のものはない。「水」を大量に必要としなければ、水利に関する共同や調整も少なく、土地の維持・管理にそれほどの労力を必要としなければ、土地への執着心も日本ほどには強くはない。日本の農村の社会構造を鈴木は前述したように「累積体」と名づけ、どの地域をとっても重層的に累積していると述べた。しかし、ここにおけるアメリカの農家の結合の種類は、経済的には甲町に、協会は乙町にというように依存する地域が異なる。これは、日本の農村で各種寄り合いを行うと、行政、氏子、檀徒、講中、近隣等など、どの寄り合いにも同じ成員が集まるのに比して大きな相違点となる。そのことが生み出す異質性をさらに詳細にみれば、次のようになる。

> 第二の結合の型（アメリカ的農村集団を指す－筆者）においては、協同体の位置あるいは協同体相互の境界線を決定することは困難である。その理由は、ひとつの結社がある地域の全農民を網羅していな

いからである。また、一定地域の農民達の中の若干の者が加入している結社は、いずれも他の農村地域からの成員も含むし、また農業外の成員も含み、その地域をはるかに超出する地域にまたがり、時としては全国または全世界にも及んでいる。例えば、ある地域内の250戸の農家のうち150戸が旧教の教会に加入し、50戸はローマ旧教の教会に、また、残りの50戸はギリシャ正教の教会に加入しているとする。この場合、宗教に関しては、この地域の農民たちの全集団は三つの集団に分裂している。…同様のことは一定地域内の農民の政治に関する集団所属についてもいえるのである。この場合においても彼等は区分されており、全般的紐帯はもたない…（前掲書、p. 115）。

ここからいえることは、日本の農村はアメリカに比べ、成員はより協同体に強く結びつき、連帯性は地域的に局限され、それらの網の目は固定的であり、隣人は重層的であることである。長い日本の農村の生活は農民の性格をアメリカとは対照的にこのように形成してきた。

これらの鈴木の調査・分析から現代の諸問題の解決の糸口を読み解くことができるのではないかと思う。

４．おわりに

はじめに、日本人の自立心の希薄さをあげ、このことが近年のいじめや自殺と関係があるのではないかと考えた。また、ケイタイ電話による頻繁なメールのやりとりも同じ根拠をもつのではないかと述べた。この自立心の希薄さが、集団を求め、さらに集団から疎外されることをおそれ、おそれる気持ちがいじめを生む。

最初に、子どもたちが母親世代からどのようなしつけを受けてきたかについて検討を行った。子育ての理念として「自立性」が意識されていたのかを知るためにスポック博士と松田道雄のしつけの違いを比較検討した。子どもは10代から30代の青少年世代と考えたが、ケイタイ・メールのやりとりに関しては、年代の幅の取り方が広すぎたかもしれない。しかし、「自立性」については、アメリカ型のしつけと日本型しつけの比較考察を行えば、子どもたちの自立性を身に付けていく過程を観察することができると推察した。

しかしながら、1960年代～1980年代に子育てを経験した年代の母親たちのうち、スポック博士のアメリカ式の「自立」志向の子育てに共感した層は時間的に短く、「ねかしつけ」や「抱きぐせ」を例にとった自立志向のしつけは、日本には定着していないことが判明した。

つまり、母親たちの「育児書」の学習は、アメリカ式にやや近づいた時期もあったが、基本的には、従来の日本的しつけが続き、子どもたちに従来の日本的性格が受け継がれていっているように思える。そして、その背景には日本の農村で育まれてきた重層的累積体としての集団本位的性格があり、それは容易にはアメリカの農村で育まれてきた開放的で異質性の高い個人主義的性格を受容することにはならないということも示していた。

戦後60年を過ぎ、これほどの近代化と都市化を遂げているにもかかわらず、日本人の社会的性格は、数百年の村の生活に息づく精神を体現している。この精神については、鈴木により詳細な分析がなされたが、このさらなる分析については今後の課題としたい。

参考文献

・大久保孝治　「家族の寝方に関する考察」（全国家族調査会『コーホート比較による戦後日本の家族変動の研究』）2005年。
・倉沢進　『コミュニティ論』、放送大学、1998年。

・佐藤直樹　「ケータイが＜世間＞を肥大化させている－ひとりでいてもひとりじゃないという奇妙なコミュニケーション－」（モバイル社会研究所『Mobile Society Review』）、2006年。
・鈴木榮太郎　『日本農村社会学原理』、未来社、1961年。
・Benjamin Spock, M. D『スポック博士の育児書』、暮しの手帖社、1966年。
・谷口祐司　『育児の質問箱』、育児文化研究所、1987年。
・松田道雄　『育児の百科』、岩波書店、1967年。